

顎 顔 面 外 傷 に つ い て *

—特に治療の立場から—

口腔外科学第一教室 千 野 武 広

昭和36年11月より昭和43年10月までの満7年間に演者が本学に赴任する以前に在職していた札幌医科大学口腔外科で取り扱った外傷患者645症例の経験にもとづき、これらの顎顔面外傷患者に対する治療という立場から、その診断あるいは治療法など関連した種々の問題をふくめて総括的な考え方とさらに治療法については具体的に症例を呈示し論及する。

1. 臨床統計

- 1) 外来患者総数に対する外傷患者数の比率は約1.7%であった。
- 2) 入院患者総数に対する比率は14.2%であった。
- 3) 原因別では交通事故によるものが約半数を占めていた。
- 4) 性別では圧倒的に男性が多く、年代別では20才代をピークとしていた。
- 5) 部位別発生頻度は下顎骨のみの症例が61.2%で、この症例にさらに下顎骨骨折とそれ以外の上顎骨や顔面骨骨折との併存例をも加えると下顎骨骨折症例は75.7%であった。

2. 歯牙および歯槽骨外傷

上顎骨および下顎骨外傷に関連して歯牙および歯槽骨外傷がしばしば認められるが、このような場合の歯牙外傷や歯槽骨外傷は前者に対する副次的な合併損傷であるから、歯牙あるいは歯槽骨外傷が主の場合と従の場合ではおのずからその取り扱い方も相違が生ずるのはやむを得ないことである。

- 1) 歯牙外傷について
- 2) 歯槽骨外傷について

3. 下顎骨骨折

従来、下顎骨体部骨折の分類からびにその治療

法についてはその骨折部位によるものや或いは Rowe & Killey のごとき固定に使用できる歯牙の有無によるものなどがあるが、演者は下顎骨骨折の治療に際し、最も重要な点は上下顎の咬合の回復であることにより、下顎骨骨折を上下顎の咬合関係より3つに大別しそのおのおのの整復固定法を中心に治療法を述べる。

- 1) 第1型：上下顎に欠損歯がほとんどなくまた歯牙の植立も強固で明らかに咬合関係が判明する症例について。
- 2) 第2型：上下顎に多数の歯牙欠損が認められるにもかかわらず、咬合関係が或る程度は推定可能な症例について。
- 3) 第3型：上下顎の歯牙がほとんど欠如し咬合関係が不明な症例について。
- 4) 特異的な整復固定法を必要とする症例について。

4. 広義の上顎骨骨折

- 1) Low level fracture について。
- 2) 頬骨、頬骨弓骨折について。
- 3) 眼窩底骨折について。
- 4) 陳旧性上顎骨骨折について。

顎骨骨折に対する治療の要点は言うまでもなく出来るだけ早期に上下顎を受傷前の咬合状態に整復し、機能的に正常な咀嚼運動を営ましめるにある。しかし近年の交通事故による顎顔面外傷は重症化の感が強く、このような現況下においてわれわれ口腔外科にたずさわるものとして、口腔外科についての社会的啓蒙と同時に災害外傷関係各科とより接近し、これら外傷患者に適切な処置をほどこすべきであろう。

* 第6回、昭和48年5月25日開催